

	<p>2011年7月15日 第85号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 <a href="http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/">http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/</a> E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a> 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&amp;fax3969-7124</p>
---	--

## ばった広場に来た昆虫

都立赤塚公園城址地区に草原のビオトープ「ばった広場」が誕生して、今年は12年目になる。定期的、定量的な昆虫調査は筆者の力不足で行っていないが、ばった広場で見ることが出来た昆虫について書いてみたい。

### アオオサムシ

草刈の時、枯葉の下に潜んでいたアオオサムシを何回か見た。本州以南のオサムシ類(狭義の)は森林性の種が多く、本種も森林と深く結びついた種だと筆者は思っていたので、ばった広場で昼間にアオオサムシが見つかったのは意外であった。夜間や早朝、林縁の草原や、畑地で活動中の本種をこれまでも見た事はある。夜間は森から出て餌を探し、明るくなると森に戻るのが本種の基本的なパターンだと考えていたが、案外草原だけでも生活できる昆虫なのかも知れない。ばった広場では越冬中の個体も見たことがあり、笹目橋下流の荒川河川敷でも1回だけだがトラップで本種が見つかっている。

北は青森県まで生息する種だが平野部に多く、関東地方南部でも標高1000m以上の深い山ではほとんど見られない。秩父三峰の標高1200m付近で本種が採集された例が珍しい記録として報告されている。深い山よりも人里的な環境、深い森林の内部よりも林縁的な環境を好む種とって良いようだ(房総半島のいわゆるアカオサは別かもしれない)。板橋区での本種衰退は樹林地の面積縮小と共に林縁の草地、畑地の消失が原因となっていると筆者は推定している。アオオサムシがこの先も長くこの地で繁栄するためには、ばった広場などの草地が維持されることが不可欠であると思われる。

### ヒメウラナミジャノメ

20数年振りに筆者が昆虫を再開したのは1998年である。久し振りに見た板橋の昆虫、最も意外であったのはヒメウラナミジャノメが見つからないことであった。1950年代には栄町の自宅庭にも住んでいた蝶である。最も普通の蝶の一種がヒメウラナミジャノメだったのである。

1990年の板橋区昆虫調査では舟渡の荒川河川敷のみ、2000年の調査では本種を意識して調べたが全く見つからなかった。区内で本種がようやく見つかったのは2003年、白子川と新河岸川の合流点、落合橋のたもとであった。和光市の芝宮橋付近にあるハンノキ混じりの樹林地を中心に多数見られ、落合橋まで広がっていた。この時は笹目橋付近の荒川河川敷では見つからなかったが、成増から赤塚にかけてここが生息地があったようだ。翌年は笹目橋付近から少し下流まで見られ、ばった広場でも最初の1匹が採集された。2008年の調査では荒川河川敷、赤塚から西台まで数箇所で見発見されている。板橋区内で分布を拡大したのは明らかであるが、本年はまだばっ

た広場を含め区内では確認していない。

本種は草原の蝶だが、東京付近平野部に限れば樹木が付近にある草原に多い。真夏の強い日差しを嫌うようで、朝は開けた草原で目にするが、昼には木陰に逃げ込むか草丈の高い草やぶの内に逃げ込み陽を避けている。ばった広場でも日中は木陰になる所にいることが多い。

本種が多産する秋が瀬公園や新河岸川芝宮橋上流には草丈の高い草原と樹林地が混在している。赤塚公園でも樹林地に沿って帯状に背の高い草地を残せばヒメウラナミジャノメが居つくと思われる。

### 荒川から飛んで来たバッタ ツチイナゴとショウリョウバッタモドキ

ばった広場から荒川河川敷までは直線距離で約1.4km、羽根を持った昆虫には容易いことかどうかは判らないが、移動可能な距離である。溜池には生息しない水生昆虫が、灯火採集により数種類ここで採集されていることから確かである。

ツチイナゴとショウリョウバッタモドキは板橋区では荒川河川敷のみで記録されていた種である。両種ともトノサマバッタに較べると飛翔能力は大分低いと思われるが、ここまで移動してきたようだ。途中には住み着けるような草むらは無い。緑の回廊など無くてもこの程度の距離ならばやって来れる昆虫もいるといえる。数年前からほぼ毎年目撃されているので、ばった広場で繁殖しているようだ。シブイロカヤキリモドキとカンタンも記録されているが、単年度だけであり定着はしていないようだ。

### ガガイモに来る昆虫

ガガイモは種子を風に乗せ、分布を広げる植物で板橋区では各地に見られる。だが大抵は草刈の時、刈られてしまい大きく育つことは少ない。毎年花を咲かせ種子が稔る安定した生息地は荒川河川敷のみである。ばった広場では開設後2、3年で生えてきて、大きく育つようになった。

ガガイモのみを食草とするチャバネツヤハムシ、ギンツバメ(蛾)が直ぐにやって来た。その後ジュウジナガカメムシとヒメジュウジナガカメムシ(両方とも東京都未記録種だが未発表)ほぼ同時に発見された。前者は寒地系で秩父山地の標高1000m以上の地点にも生息する。後者は暖地系のカメムシで近年関東地方では分布拡大中である。この2種が同一時期一地点で見つかった意味は何であろう。荒川河川敷でも両種が見つまっているが、ジュウジナガカメの方が両地点ともに少ない。荒川流域に沿って現在筆者が分布調査中である。

### ヒメクサキリとササキリ

ヒメクサキリは冷温帯系、ササキリは暖温帯系だが両種ともばった広場が出来る前からここに住んでいた昆虫である。特にヒメクサキリは東京付近の平野部では記録が少ない種である。平地では雑木林の林縁に住み、アズマネザサを食草としているようだが、本来は草原性の昆虫のようだ。信州では水田にも住んでおり、イナゴと一緒に佃煮にされているようだ。

現在、ここでは林縁部よりもばった広場で頻繁に見られ、以前よりも増えてきた印象がある。両種とも板橋区内では赤塚公園のみに生息する種である。

### 謎のカメムシ

ばった広場で筆者が偶然採集した昆虫がこれである。ひょっとしたらと思い、東京農大の石川忠博士のもとに届けたところ、日本国内では30年振りの記録で、これまでの発見例も非常に少ない種であるとのことであった。生態解明のきっかけもばった広場で得られた。現在石川博士のグループにより、分類、生態が研究中である。草原を住处とする昆虫であることは確かなようである。  
(釣巻岳人)

# 樹林や湧水を守るということとは？

## 私の白子川との出会いと

## 「白子・大坂湧水林保全会」(和光市)の活動のあらまし

### 1. 「白子の泉」との出会い

板橋区の成増から川越街道を西に下っていくと、東埼橋（とうさいばし）という東京都と埼玉県の境になる橋があり、その下を「白子川」が流れています(写真右)。

私がまだ小学生から中学生になった頃（昭和20年代前半）、私は住まいのあった成増から足を延ばして和光市白子の熊野神社のあたりにまで昆虫採集に出撃していました。小学生だった私が、初めて和光市の旧川越街道に出て驚いたのは、一軒の魚屋（魚くめ）さんの店先にあった樽のような丸い入れ物から大量の水が、盛り上がるように噴出している光景でした。そこから、すぐそばの側溝に流れ落ちた水は、あたかもごうごうと大きな音を立てて渦を巻いて、溢れるように側溝を流れ下っているのです。



「この大量の水は何なんだろう？」泉とか湧水などの存在をほとんど知らなかった私にはこの光景は異様に映り、強烈な印象を子供心に受けたのでした。成増の程近いこんなところに、今まで見たこともないこんな光景が存在するとは本当に思いもよらないことでした。異次元に近い印象であったともいえます。私は、この不思議な町の風景を時々昆虫採集とは別に見に行っていました。中学の後半に入り高校受験の影が迫るにつれ、鮮烈な印象から遠ざかってしまいました。

50年以上を経て、私はまわりまわって再び「白子の泉」にたどり着きました。再会した「白子の泉」は周辺の開発が進み、私を異次元の世界と驚かせた、溢れるような泉の勢いは完全に衰えていました。泉の溢れていた崖線の下には駐車場が出来、コンクリートで固められていましたし、崖線は緑の樹木で覆われてはいましたが、その上の平地は開発され住宅が迫っていました。あの「魚くめさん」の店前に吹き上げるように流れ出た力強い水量はもう見えず、細い管から僅かな水が流れ落ちているだけでした。けれども泉は健気にもその流れを今も浸み出すかのように、旧川越街道の左側のあちこちの崖線から崖下に流れ落していたのです。

50年以上を経て、私はまわりまわって再び「白子の泉」にたどり着きました。再会した「白子の泉」は周辺の開発が進み、私を異次元の世界と驚かせた、溢れるような泉の勢いは完全に衰えていました。泉の溢れていた崖線の下には駐車場が出来、コンクリートで固められていましたし、崖線は緑の樹木で覆われてはいましたが、その上の平地は開発され住宅が迫っていました。あの「魚くめさん」の店前に吹き上げるように流れ出た力強い水量はもう見えず、細い管から僅かな水が流れ落ちているだけでした。けれども泉は健気にもその流れを今も浸み出すかのように、旧川越街道の左側のあちこちの崖線から崖下に流れ落していたのです。

### 2. 「白子川とその流域の環境を守る会」の発足

和光市の片隅で、仮称「白子川を守る会」が発足したのはこのような現状、和光市を象徴する泉の枯渇の現状を憂慮してのことであったと思います。平成13年頃のことです。

この会のスタンスをどこに置くかが話題の中心になったことを覚えています。和光市の白子のみに拘れば当然「湧水を守る会」となるところなのでしょうが、集われていた方々の中にはそれでは考えが狭すぎるのもっと広く流域全体を考えたい、また湧水のことだけではなく広く水循

環を考えに入れて湧水のことを考えるべきとの意見が主流となり、前記のような会の名称となりました。この会の活動の趣旨は練馬区と和光市、そして板橋区の1市2区をまたぐ流域周辺の水循環を調査し、考え、その白子川や「湧水」への水環境を通して地域の方々の親水性を高め、自然環境の保全を図っていききたいということでした。それと同時にそれらの地域の歴史や文化などにも関心を払っていききたいという気持ちもありました。特に、白子の町はかつて江戸時代には松平家を擁する「川越宿」と共に「白子宿」として街道の重要な拠点にもなっていたという歴史的な地でもあったのです。

和光市のグループの活動は、毎月第2土曜日に白子2丁目交差点周辺の湧水2地点、大坂のくぼ地の湧水(写真右)、

その坂を上っていったところにある柴崎さんの井戸、そして東埼橋下流の白子橋の計測調査を続けています。

「白子川と流域の水環境を守る会」の湧水の調査地点の一つであった前記「大坂のくぼ地」が数年後、私たちにとって極めて重要な地点としてクローズアップされてきました。



大坂窪地にある湧水の流れ (2009年1月)

### 3. 「白子・大坂湧水林保全の会」の誕生

平成20年9月30日に「白子コミュニティセンター」で行われた「白子・大坂湧水林保全の会」のフォーラムでの中間報告書の巻頭には次のような一文が10名の役員の連名のもとに小冊誌の裏表紙に載っています。

“ 中間報告にあたって ”

[ 和光白子2丁目「大坂」に、斜面林およびそれに隣接する湧水地からなる緑地空間があります。このような緑地空間は、和光市の自然資産としてのみならず、歴史・文化資産としても貴重であり、その保全は市の重要課題となっています。

平成18年、地権者のお一人から、「この限られた区域は貴重な場所だけに、何とか活用が出来ないものか」とのお話をお聞きし、同年12月、市内の環境市民団体を中心に5団体の有志で準備会を立ち上げ、平成19年6月「白子・大坂湧水林保全の会」を発足させました。

以来、保全の方策を探るため、県・市の緑地保全の考え方や方針、他市の市民団体の先進事例についての学習会、及び地域住民の当地域への愛着や歴史・生活文化を語り合う湧水サロンの開催、さらに、湿地内の生態を把握するため、地権者さんに草を刈らないようご了解を得て平成19年8月より毎月、植物や昆虫などの生物調査を実施してきました。

その間、斜面林は、和光市の「市民緑地」に指定され、平成20年4月「大坂ふれあいの森」

としてオープンしたことは嬉しい限りです。今後、当該地区が、窪(くぼ)地の湿地を含めた一体として永続的に保全されていくことを願うものです。

ここに、当会のこれまでの活動を振り返り、今後の活動方針とするため中間報告としてまとめました。ご一読いただければ幸いです。

以上、この文でお分かりのように、「白子・大坂湧水林保全の会」は、和光市内の幾つかの市民



団体と共に一つ目的で、平成19年にその行動を始めることになりました。

まず、手始めに、私たちは参加された幾つかの団体の代表会議を何回も開いて、どのような基礎的考えや方法でこの湧水保全林を保護・活用、あるいは市民のものとしていくかという基本的なアイデンティティーを求めていくことになりました。

大坂保全林 入口から奥をのぞむ(2008年12月)

話が時間的に前後しますが、本会の「設立記念講演会」が、平成19年6月24日に白子コミニティーセンターで行われています。当日は、NPO法人、エコシティ志木副代表、毛利将範氏が講師として来て頂き、「エコシティ志木の環境保全活動」と題するお話を聞くことが出来ました。主な内容は、志木の地名由来、川のまち志木、エコシティ志木の環境プランづくりと環境を守る活動、まるごと博物館、河童のつづら活動などについて、でした。

そのあとすぐ7月25日に同じ会場で、「白子湧水群の魅力」とのテーマで二つの立場からお話を聞き、勉強会を開いた。

#### (1)「和光市の緑の現状と方針」和光市役所環境課 成瀬・小泉主幹

特定緑地保全区について、午王山(ごぼうやま)の例が話されました。市民緑地は市民に開放することが前提で長期にわたり借り受けて保全することであること、今後は地球温暖化防止の観点からも斜面地、遊水池の確保をしていきたい、との前段がありました。さらに言われるには、この場所は、緑地と湧水地が一体になっています。しかし、緑地の保全制度はあるけれども、湧水の保全は制度としてはない、ということでした。湧水は地権者個人のものとなっているからですが、私は湧水を自然資源の保護対象にならないものかと思っています。保全区域は和光市緑化推進条例により制定してあるが、緑地、林がただ存在するだけで良いのか、より現実に合った形、利活用の出来る形で残すことが出来ないかと思っています。午王山の場合は何とか財政が取れたので実現したが、特定緑地保全地区は財政的な裏づけが必要になるので、個別の保全計画と財政面の計画が一緒になった計画が必要になるので、今後「大阪の保全林」

の実現が追い風になればと期待していきたいと思います、との話がされました。管理は市だけで出来るものではなく、地域の方々、市民団体の協力を得て出来るだけ広めていきたいと結ばれた。

## (2)「和光の湧水の仕組み」 緑と湧水の流れの会代表 高橋絹世氏

この会は平成11年に白子湧水の自然現況調査をきっかけに発足し、いらい和光市の緑地の調査を行ってきました。・・・自然現況調査は市民と市の協働という形で進められてきました。武蔵野台地のハケにある和光市、特に白子湧水群は大変湧水の豊かなところで、1分間300リットル流出しています。私は、調査の体験を繰り返し、実感として湧水の素晴らしさを感じています。路頭には、笹、シダが共生しており、カタクリ、イチリンソウなどの貴重な野草が生息しています。大阪の斜面がふれあいの森として指定され、活用されつつ保全していかれたらと思っています。私たちの会は、そのほかにも樹林公園の植生についても管理と提言を行っています、というようなお話でした。

その後も、「白子宿と湧水」というテーマで、和光・文化を育む会の相田俊孝氏をお呼びしての湧水サロンや、「白子湧水の守り方」と題した勉強会では埼玉県環境部みどり自然課から主幹や主査などの方々が来られ緑化計画・緑のトラストなどについて語って頂きました。また、年を越しては、「緑地保全基金制度の取り組み」のテーマのもとに“朝霞市の緑の基金や”練馬区ハッピー基金”などについての学びをいたしました。この会は、かなり張り切って前進を目指して活発に活動していたと思います。

私自身もこの「大坂保全林」に関して何かできないかと思い、足りないながら毎月定期的調査として現地の「生物調査」を平成19年から開始し、現在に至っています。先程の平成20年9月の中間報告でいえば、植物では、樹木(木本類)はイヌシデ、タラノキ他19種、草(草本類)は双子葉類ではイチリンソウ、クレソン、カスマスソウ他64種、また、単子葉類ではアシボソ、カサスゲ他



湧水の中に成長するクレソン(左)とウキゴケ(右)

4種類、シダ類は未調査で4種類、蘚苔類はウキゴケ、ホソバミズゼニゴケ、ジョウレン

ホウオウゴケ他9種類(コケ類は絶滅危惧種を含む:須貝郁子さん調査による)昆虫類は甲虫類・鱗翅類など5目で、オジロアシナガゾウムシ、ヤナギルリハムシ、クロアゲハ、マルハナバチなど確定されないものも含め多数におよぶ。割愛しますが、その他、クモ類、貝類、鳥類、爬虫類、哺乳類での調査結果があります。

## 4.「大阪保全林の会」の活動の意義と現在の状況

現地、「大坂の保全林」は、これまでの記録の紹介でもお分かりのように(p5写真参照)前面に斜面林が広がり、その株は湧水と絞り水で形成された湿地状態の草はらになっていて、一番手前に湧水による小さい小川(p4写真)が流れている生態的地質的な状態となっています。か

つての白子宿であり、周辺に町を控えているそれほど広い面積とは言えない土地の中にこれだけの生態系を備えている極めて貴重な場所ではないかと私は思います。この地をなるべく、人の手を入れない状態に保全していくことは、和光市としても、この白子の町にとっても大変意義のあることのように思います。

この会の立ち上げの時点では、先の中間報告で紹介したように市内の環境団体の「子育てネットワーク」、「まちづくりNPOセンター」、「みどりと湧水と流れの会」そして私の所属している「白子川の流域とその環境を守る会」など幾つかの会によって、この会は組織されていました。「大阪保全林」の今後のことは、当然のことながら、これらの団体の合意が行われた上で行われるということ骨子とすることであったのです。もちろん、このことは運営会議の中で、集われた皆さんの賛同に基づいて決められたことでした。少なくとも、上記に述べたようにこの会の進み方には試行錯誤がありました。誤りはないようにみえました。

町中にあるこの狭くはあっても貴重な空間をどのような保全方法で、将来にわたって守り続けるかは、この「大阪保全林の会」の大きな課題であって、このことについて地域の多くの方々のご意見を集約して、一つの方向に向かうべきものである筈のものなのに、その模索中にその中の一部のもので、もし自分たちの意向の基に走り始めていたのでは、この計画は大変な危機に陥ってしまいます。

写真によっても多少はお分かりかと思いますが、この地は前述のような特徴をもった生態系、地形を有している一方で、斜面林は崖線の崩落が徐々に進んでおり、二か所に見られる湧水の一つは雨量の多少によって枯れることもあり、湿地は何とか保たれてはいるものの、手前の草地は放置状態を続ければイヌシデなどの樹木の芽生えが成長し、樹林化する遷移がみられるような保全方法を困惑するような様々な困難な状況にあります。

果たせるかな、ただでさえそのような地形的、植物遷移としての難しい事情を抱える場所にも拘わらず、さらに、人間的な問題が起こって、事は順調に進まなくなりました。前述のような作業を行っているうちに早速、最初の挫折がありました。それは、この会に加わっているある一つの団体が、進み始めたこの会の皆さんからの同意を得ることもなく単独に、「大阪保全林」に入り込み、雑草の除去と称してセイタカアワダチソウを抜いたり、湧水の流れの藻類を岸にすくい上げたり、擬木を埋めて綱を張り敷地内に境を作り始めたのです。冷静に考えれば、そのこと自体は、全て困惑するということばかりではないとしても、会の同意を得ることもなくいつの間にか、ことが行われていってしまうことは、なんとも言えない大きな影響を「大阪保全林の会」に与え続けるものだったのです。

大切な個々の自然環境は、ここにしか存在しない環境です。一度、人の力で変えられてしまった自然の姿は二度と戻ってこないのです。そのために私たちは、「あらゆる総意」を尽くさねばならないと思います。それを行うこともできないまま、過去どれだけの自然地が全国で失われたことでしょうか。今回の私たち「大阪保全林の会」が遭遇しているこのような問題、つまり自然が守られる前に、まず人間の確執が起こってしまう現象は、考えてみると全国各地にみられることではないかと考えます。守るべきは自然地。対立すべきは、一つのグループの中ではなく、もっと他にあるはずで。

ベストは無理にしても**よりベターな方向**を見出してこの貴重な空間を守り、少しでも地域の中に何らかの形で発展させたいという思いを、なお「大阪保全林の会」のメンバーは抱きつつ、現在苦難の道を歩いています（岩田 浩司）

# 活動のお知らせ

**7月の運営委員会**：7月23日(土) 12:30～13:30

作業・観察会の後に赤塚ため池公園そばのラーメン「しらかば」で行い、報告や活動内容などを相談します。午前中の作業の状況で時間が多少ずれることがあります。

雨天で作業が中止の場合も運営委員会は開きます。

連絡先；坂本(090-4618-1295)

**会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく**

日時：9月17日(土) 12:30～

**活動の問い合わせは事務局 瀬田(3969-7124)まで**

**赤塚ビオトープの観察と環境整備(毎月第4土曜日)(雨天の場合は観察とゴミ拾い)**

軍手、タオルなど、汚れてもよい服装で。水分補給もお忘れなく。8月は休みます。

カメラ、ルーペ、双眼鏡、図鑑があるとよい。

7月23日(土) 10:00～12:00 バッタ広場ササ刈と現状観察

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

**日暮台公園樹林地観察会(第1土曜日)(樹林地内の植生と推移を観察します)**

日時：8月6日(土) 9月3日(土) 10:00～12:00 日暮台公園前集合

**バッタ広場のバッタ・キリギリス・カマキリ類の調査**

釣巻さんの指導でバッタ広場にどの位の数のバッタ等がいるか調査します。全部捕獲して調べたら放します。雨天の場合は8月27日に延期します。

日時：8月20日(土) 10:00～12:00

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

持ってくるもの：あれば昆虫網、水筒、図鑑

**赤塚城址と周辺の観察会**

日時：9月17日(土) 10:00～12:00

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

**ビオトープ管理のボランティア大歓迎**

生き物のすめる草地(バッタ広場)などの管理作業を応援していただけませんか。

大きくなった木を切ったり、セイタカアワダチソウなどの外来植物や生育旺盛なササを刈り取ったり、廃材と割った竹で周囲の柵をつくったりしています。

**あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)**